

鍋をゑろして、玉子を取出し、ままして切重ねに切るべし

切重とは同位の厚さに切てづらして重ねたくなるべし

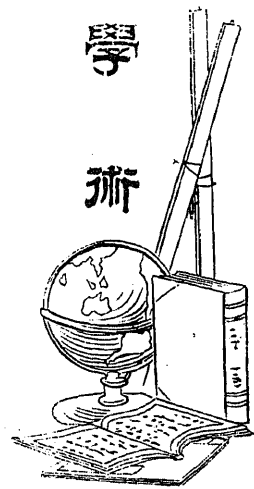
(75)

鳥田樂の拵かた

何どりにても身をおろして、一時間ほど味噌につけおき後味噌をよくぬぐひて皮をきりて身ばかりを酒をかけて焼て、あみの上にてやくべし、山椒みそ、山葵みその類をつけて青串にさして出してよし

常磐味噌の拵かた

白味噌三合赤味噌二合大白糖二百目、鍋にてそろそろと火どおりねりて、むき胡桃、白胡椒、わり山椒をいれるなり



學 術

夏の海邊(承前)

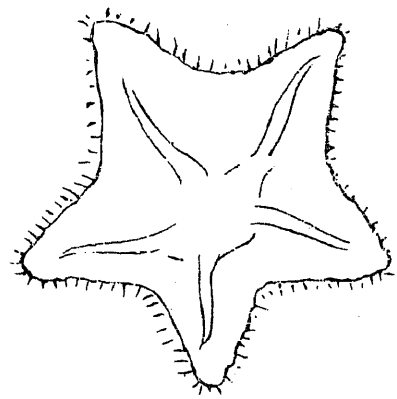
東 海 生

夏海邊に居ると、まだ面白く、澤山ある。が潮沖の方まで引いて、いままで青々としていた所が、まるで川原になつて、舟でなければ行けなかつた所でも、徒歩で行けるのであるから愉快でたまらない。小な籠を持つて浅い水の中を漁りつゝ石をおこすと、まづ人手が取れる。人手は

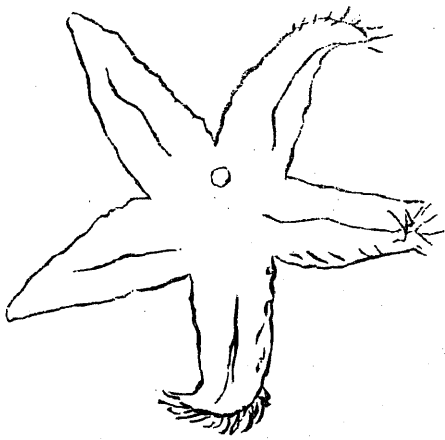
又の名を、いもみちが、いとも云ふ。其形が紅葉の葉によく似てゐるから、さういふ名を持つてゐるのだ。

普通の人手は、足が五本あるのだが、時々三本あるのや、六本あるのや、七本八本も持つてゐるのがある。これは何故であらう。

もみちが
いといふ奴
は、なかく面白
い性質を持つて居る。若しもみちが
いの手が折れて落ちると、其離れた手が又一
個のもみちが、いになつて大きくなる。夫れから折



れた手は、すぐ元の様になつてしまふ。であるから一疋のもみちが、いを取つて手を二つに折つて兩方ながら養つておくと、だん／＼どちらも完全なもみちが、いになる。石の下には、たまに海百合で、いもみのが居ることがある。百合によく似てゐるから、こんな名を持つてゐる。父さがして居ると、うにが刺をむじくさせていかめしい構をしてゐる。それから水の少多

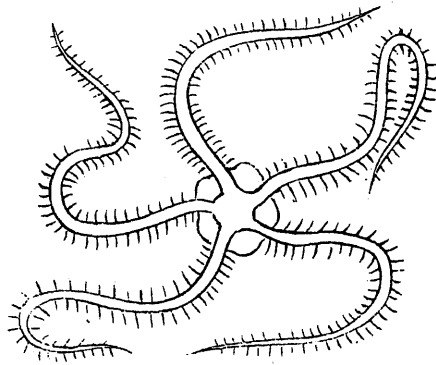


い所を靜に伺つて見ると、た、こだの、いかだの、はぜ、かれえ、ふぐなどの子が澤山ゐることがあ
る。

潮干の時に

あちらこちら
を漁つて行つ
て、岩ごろの
ない、砂ばか
りの處に行く
ど、あなごが
とれる。あな

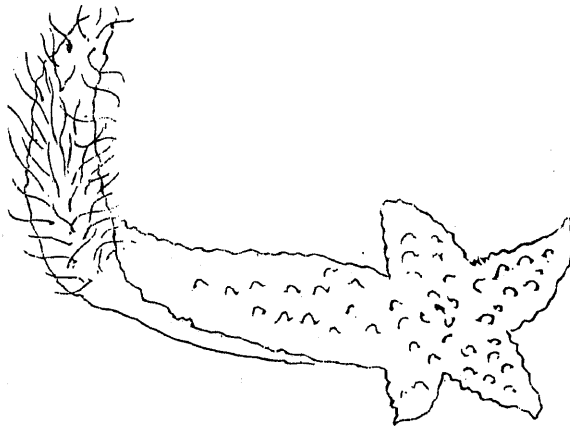
ごは大底は、砂の中に穴を掘つて這入つて居る、
で、砂の處を歩いて居ると、あなごは頭を出して
居ることがある、こんな時には、無論すぐ知れる
が、さもないければ、素人には容易に分らん。何故



かといふと、砂原にはたゞあなごの穴ばかりでな
く、かにの穴、むむしの穴、さばし虫の穴、其他
いろ／＼の

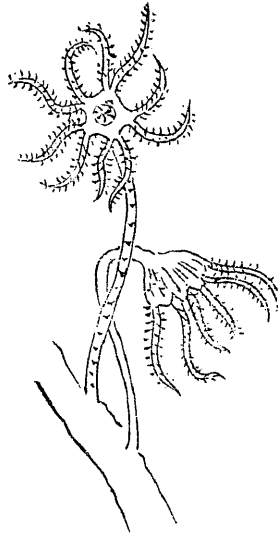
ものが這入
てる穴があ
るので其見
分けが六か
しいのであ
る。

それは、
どうして分
るかといふ
に何でもな
い。唯穴をよく見て、其穴が眞直に下の方に掘れ
てるときは、これはかになどの穴であるが、穴が



斜ななめになつて居ゐれば、それはあなごの穴あなである。そこであなごを取とるにはどうすればよいか、それにはまづ、この穴あなにあなごが果はたして居ゐるか、夫それどもぬけ出でた跡あとでないかどうかを知しることが大切たいせつである。夫それを知るには次つぎの様ようにする。即穴すなわちあなの近邊きんぺんを

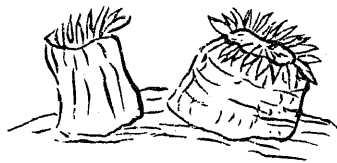
だしみう



足あしで以もつてやたらに踐ふんで見みる。すると彼かれが居ゐりさへすれば、身からだ體たいを踐ふまれてはた中なからないから、いきなり飛とび出でて逃にげることすかざす抑おさへる。すればあなごの二十や二十は譯わけもなく取とる

れる。これは海邊かいへんの慰なぐさみとしては餘程よほど面白おもしろい。磯いそに出でて一番いちばんに美うつくしく見みえるのは、いそぎんちやくである。水みづの深ふかさが二三寸位すんくちるどろの所ところに静しずに來きて見みると、赤あかいのがあつた、青あおいのがあつた、紫むらさきがあつた、白しろがあつた、實じつにいろ／＼であつて、最もっともうつくしい、之それらは皆みな四十本よんほんも五十本ごほんもある手てをひろげて、何なにか食たべるものはないかと待まちち構かかへて居ゐる。で

くやちんきそい



あるから小ちひなものでも其手そのてへさわればすぐ手てを縮ぢぢめてしまふ。それ秘手ひえてを擴ひろげて開ひらいて居ゐる處ところを見みんには、餘程よほど静しずかに行いかなければならぬ。けれどともこのいそぎんちやくといふやつは、中面なかめん白しろい、波なみがいくら荒あれていても、決けつして手てを縮ぢぢめないが、人ひとが少すくし

足音をはげしくさするど、すぐと手を縮める。これで見ると、波のなすのど其他のものがさわわのどを區別する力を持つてゐるらしい。それから又小なものを手の處に、そつと置くと手を二三本縮める、こんどは今少し大きなものを手の處に置くと十本も縮める、お終に指の一本も持つて行くと今度は吃驚して五十も六十もある手を、ピュツと一時に縮めてしまふ處を見ると、中々滑稽である。

夜の海は又別で、晝間に見ることを得ない樂がある。熱帶地方では、太陽が西に没するも光を發する小さな動物が、海の表面に上つて來る。すると海一面光の舞蹈でも始つた様で、其有様は丁度、晝間の太陽の光が波間に這入てしまつたのが、夜になつてまた出て來たかの様である。海面の光は一面に一樣ではなくて、丁度晴夜に星がちら／＼

してゐるのに似て居る。

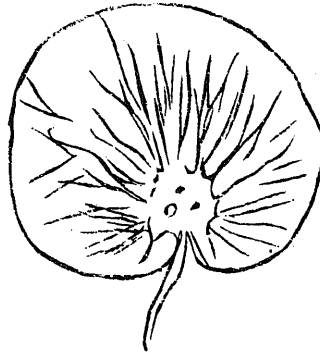
海が靜で、波のない夜には、數萬の星が海面にきらめく。其數萬の星が始は、靜にしてゐるが段々動き出す、揺り出す、すると一方の光は他を逐ふ、他は逃げる、逐いつかれて一所になる、又はなれる、おしまいは海一面の光となる、其色が赤くなる、青くなる又緑となる、白くなる。こんないろ／＼な光が遂には集つて大きな爛となる。其光景は恰も海といふ一種の天に太陽がまた顯れた様である。

風の吹く夜は、之とは異なつて波がわれて高くなり低くなり、轉げる、打合つて粉になる。これが丁度熔けた金のゆら／＼と光を發してゐるかの様である。波が岸にくだけると、波は即光の總で海岸をかざり小石までも光で鍍金される。

何が美しいといつて、此の如き海で大きな魚が波の上を飛び廻つて光の長い尾を引く程美しいものはない。波が光の炎を燃に立たせる、ボートの楫が暗黒の海面に火をつける、漁船の進むにつれて長々と尾を引く

のは、丁度慧星が尾を引く如く後の方は段々薄らいで遂に消えて仕舞ふ。實に美しい光景で

夜光貝



自然の美も此處に至りて盡せりといふ位である。

こんな光を發する動物はいろいろである。下等の原生動物から、くらげ、人手、貝類、えびの類、魚類のあるものは之等の光の原因をなすのである

其中でも殊に名高いのが夜光虫といふ原生動物である。

日本などでは、前に述べた様な美観はないけれども、夜の海の表面に時々光を見ることができ。又手桶などに汲んできて、夫をかきまわすと、銀光のする光を見ることができ。この光もやはり前にいつた動物から出すのである。

今日では大に學問が進歩したので、こんな光を怪む者はないが、昔は其理由をよく知らないのだから此光は、海の鹽から出るので、鹽は精神を以て居る、この光は全く其精神から出るのだと思つて居た(終)